

平成 30 年 9 月 10 日現在

機関番号：13101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12808

研究課題名(和文) 感興に基づく即興の機序の解析、並びに機知や機転の成り立ちを考察する試み

研究課題名(英文) An analysis of the mechanism of improvisation based on emotion, and an attempt to consider the origins of wit and tact

研究代表者

栗原 隆 (Takashi, KURIHARA)

新潟大学・人文社会・教育科学系・フェロー

研究者番号：30170088

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：栗原は2018年3月17日、ユトレヒト大学にて開催された国際ワークショップに招かれ、ヘーゲルの『精神哲学』が、その基底にある「生理学」や「心理学」から、生の展開を通して成立するものであることを明らかにし、高く評価された。

宮崎は、20世紀のフランスでカントの『判断力批判』の再読がなされた際に、感性論が共通感覚論として、他者へと自己感情を開放する可能性を持つに至った必然性を解明した。白井は、乳児がヒトの身体構造とその動作の制約について、可能な手の動きと不可能な手の動きを動画で示すことを通して、理解しているか否かを実験調査、若齢児と高齢児の認識に有意差は認められなかった。

研究成果の概要(英文)：Kurihara was invited to the international workshop held at Utrecht University on March 17, 2018, and presented the formation of Hegel's "spiritual philosophy". Kurihara's presentation was highly appreciated, as it revealed that "spiritual philosophy" is established through the development of life from "physiology" and "psychology".

Miyazaki clarified the necessity that sensitivity theory had the possibility of releasing self-emotion to others as a common sensory theory, when Kant's criticism of judgment was reread in France in the 20th century.

Shirai experimentally investigated whether an infant understands the constraints of human body structure and its motion through showing motion of possible hands and movements of impossible hands with animation. There was no significant difference in recognition of young children and older children.

研究分野：哲学

キーワード：人間学 気分 感応 感受性 感興 乳児の身体把握 共通感覚 経験的心理学

1. 研究開始当初の背景

ドイツ観念論に先立つ時代に、人間の「心 (Seele)」の在り処や機能、心と外界との「調和・感応 (Stimmung)」の機序を解明しようとする「経験的心理学」と称される膨大な研究が隆盛を見せていた。しかしながら今日に到っては忘れられているのも事実である。というも、それらの研究は、経験的な方法に終始したため、ドイツ観念論哲学によって駆逐されることになったからである。それがこの十年、Google Books によって、古今の文献が電子データとして公開されることになった今、歴史から消え去っていた経験的心理学の文献にアクセスすることが容易になった。それとともに、経験的心理学が問題として取り上げたことが、ドイツ観念論哲学へと収斂していったことも明らかにされた。経験的心理学はいわばドイツ観念論哲学の前哨であるとともに、基礎でもあった。こうした経験的心理学の問題を、哲学的あるいは実験心理学的に解明することは、哲学の歴史の見直しに繋がるとともに、「心」の概念的な研究に新たな脈路を解明するものと期待された。

2. 研究の目的

経験的心理学が主題としていた心と外界との「調和・感応 (Stimmung)」の機序を解明することが目指された。それは、理性や知性を媒介としないため、哲学的な方法では解明されるべくもない。したがって目指されたのは、たとえば、(1) 情景や音楽に合わせて舞踊家が身体表現をする際の「感興」に基づく「即興」の機序を、実験心理学の研究者が解析を試みることであり、(2) その結果を受けて、哲学の研究者が言葉や態度による反応に援用することを通して、言葉や態度による「即興」とも言える「機知」や「機転」の成り立ちを考察することであり、(3) これにより思いつきだとしか見なされてこなかった「即興」や「機知」さらには「機転」の成り立つ基底に、「感興」を見定めるとともに、(4) 雰囲気に気分が感応する際には、気分は単に主観的であるのみならず、間主観的に働くことを概念化することであった。

間主観的に働く気分ともされる「調和・感応 (Stimmung)」については、経験的心理学の研究者である、チュービンゲン神学校教授の Johann Friedrich Flatt、同教授 Jacob Friedrich Abel らが展開していた。そして両者からの薫陶を受けたヘーゲルが、『精神哲学』の「人間学」で展開したのであった。したがって本研究課題は、ドイツ観念論哲学の基底と前哨を明らかにすることも目的としていた。両者を繋ぐ問題の一つが、「学への入門 (Propaedeutik)」の意義と役割を担うのは何か、ということであった。超越論的観念論は、こうした意義と役割を担うものとして構想されたことを跡付けることも目的とされた。

3. 研究の方法

舞踊家が舞踊作品を作り上げる過程と方法を解析したり、ジャズ演奏を実体験したりすることを通して、「即興」や「機知」さらには「機転」を単に「思いつき」として片づけるのではなく、「認知」が前提となっていることを明らかにしようとした。その結果、「即興」や「機知」を成り立たせるのは、「感興」であって、これは、「心」や「気分」が外界と輻輳することを通して、概念的な認識と、概念化以前の感情との交感によって成り立つことを明らかにしようとした。

こうした研究方法のモデルとなったのは、実に、ヘーゲルの『精神哲学』であった。経験的心理学をどのようにしてヘーゲルが、精神哲学のなかで超克していったかも明らかにされることになった。「調和・感応 (Stimmung)」が、「自然的な心」の働きに見定められるとともに、主観的であるだけでなく、間主観的な働きを通して、自然や他者との交感を実現するものとして想定されているため、「調和・感応 (Stimmung)」の脈路の解明にあたった。

4. 研究成果

「即興」が知的な作用であれ、感情的な作用であれ、それを成り立たせる「感興」は、感覚から惹起された情緒の働きではある。しかしながら、面白がるためには、面白さが分かっているなくてはならない。即興や機知さらには機転などを成り立たせる「感興」は、概念化できているからこそ、興に乗ることもできるという、概念と情緒との往還構造が明らかにされた。それはいわば、低次元の心や感情と、高度な知性や概念との往還構造において成り立つものであることが確認された。

実にこうした構造こそが、経験的心理学を批判的に超克したヘーゲルの『精神哲学』における知性の基本構造、すなわち意識下の想念が明るみにもたらされて概念化される一方で、経験が忘却されたり都合の悪い事実が封印されたりする想念の往還の道、知性の「豎坑」として示されていたことも明らかにされた。その意味では、ドイツ観念論に先立ち、隆盛を見ていた経験的心理学を内包しながら批判的に超克したのは、まさしくヘーゲルの『精神哲学』であったことも、確認された。

また『精神哲学』を顧みるに、合理的な知の一辺倒ではなく、感情や情緒面を育むことが、知の創造性を高めることに繋がることも、改めて明らかにされた。知性の「豎坑」はまさしく、判然としない未分明の想念が、心の奥底から知へと湧き立つとともに、逆に知が記憶へと埋没するに到る、両方向の通路でもあったことが明らかにされた。そうした上向の路と下降の路とが輻輳している理念や知の構造も、プロティノスやブルーノでも語られていて、ゲーテを経て、ヘーゲルに取り込

まれたことも確認した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8件)

伊村知子・白井述「感覚・運動の発達」(『ベ
ーシック発達心理学』1巻、77~85頁、2018
年)

白井述・伊村知子「視覚発達研究の技法」
(『視覚実験研究ガイドブック』1巻、257~
264頁、2017年)

宮崎裕助「プロト脱構築について ルタ
ー、ハイデガー、デリダ」(『現代思想』第46
巻2号、254~270頁、2017年)

宮崎裕助「シラーの『遊戯衝動』から、カ
ントの『物質的視覚』へ ボール・ド・マ
ンの歴史的唯物論に向けて」(日本シェリ
ング協会『シェリング年報』24巻、52~56頁、
2016年)

栗原隆「ヘーゲル『精神哲学』の基底と前
哨」(日本ヘーゲル学会『ヘーゲル哲学研究』
22号、146~162頁、2016年)

和泉絵里香・伊村知子・白井述「児童期に
おける線運動錯視知覚」(『電子情報通信学会
技術報告』49-54巻、2015~2067頁、2016
年)

栗原隆「生の諸相とその展開 ヘーゲル
における生の交流とその気脈」(日本シェリ
ング協会『シェリング年報』24巻、126~141
頁、2016年)

栗原隆「若きヘーゲルと心理学」(新潟大
学人文学部『人文科学研究』137輯、1~25
頁、2015年)

[学会発表](計 11件)

Takashi KURIHARA : Die Physiologie
und die Psychologie begreift die
Philosophie des Geistes, welche von unten
gaert. (International and comparative
workshop : Between reason, understanding
and feeling. 2018年3月17日、 Utrecht
University)

栗原隆「生理学や心理学を呑み込みながら
湧き立つ精神哲学」(日本ヘーゲル学会、
2017年12月16日、東洋大学白山キャンパ
ス)

宮崎裕助「出来事としての構想力 カン
トにおける数学的崇高の問い」(哲学会第55
回研究発表大会、2016年10月29日、東京
大学法文2号館)

Nobu SHIRAI & Tomiko IMURA : Gaze
patterns to the Focus of a radial optic flow
in school age children.

39th European Conference on vVisual
Perception, 2016年8月31日、Auditori of

Barcelona)

金子歩駒・白井述「構成要素の分割・継時
呈示による逆 Mueller-Lyer 錯視」(日本視覚
学会2016年夏季大会、2016年8月18日、
朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター)

Yusuke MIYAZAKI : Towards another
Aristotelian Traddition of
Friendship:Derrida Agamben. (5th
DERRIDA TODAY,2016年6月9日)

Takashi KURIHARA : Grundlage und
Vorarbeiten zur Philosophie des Geistes
von Hegel. (Philosophie und Anthropologie
um 1800、新潟大学駅南キャンパス「ときめ
いと」2016年5月21日)

栗原隆「一者の影 ヤコビによる『ブ
ルーノからの抜き書き』の思想的な意義に
ついて」(日本哲学会第75回大会、2016年5
月15日、京都大学)

栗原隆「ヘーゲル『精神哲学』の基底と前
哨」(日本ヘーゲル学会第22回大会、2015
年12月19日、中央大学後楽園校舎)

白井述・伊村知子「放射運動の焦点に対す
る注視行動の発達の变化」(日本基礎心理学
会第34回大会、2015年11月28日、大阪樟
蔭女子大学)

栗原隆「『生』の諸相とその展開 ヘー
ゲルにおける生の交流とその気脈」(日本シ
ェリング協会第24回大会:招待講演、2015
年7月4日、神奈川大学)

[図書](計 7件)

鈴木光太郎(訳)レオ・グラッセ(著)『キ
リンの一撃 サヴァンナの動物たちが見
せる進化のスゴ技』(化学同人、133頁、2018
年)

鈴木光太郎(訳)ジャン=フランソワ・ド
ルチエ(著)『ヒト、この奇妙な動物』(新
曜社、400頁、2018年)

宮崎裕助 他『新・カント読本』(法政大
学出版局、422頁、2018年)

宮崎裕助『21世紀のソシュール』(水声社、
340頁、2018年)

宮崎裕助 他『共にあることの哲学と現実
家族・社会?文学・政治』(書肆心水、
288頁、2017年)

宮崎裕助 他『続・ハイデガー読本』(法
政大学出版局、2016年) そのうち「カント
超越論的構想力と構想 暴力」(87~
94頁)

宮崎裕助 他『終わりなきデリダ』(法政
大学出版局、2016年) そのうち「人間/動
物のリミトロフィ ジャック・デリダによ
るハイデガーの動物論講義」(51~78頁)

鈴木光太郎『増補 オオカミ少女はいなか
った』(ちくま文庫、333頁、2015年)

[産業財産権]

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

栗原 隆 (KURIHARA Takashi)
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：30170088

(2)研究分担者

鈴木 光太郎 (SUZUKI Koutaro)
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：40179205

辻元 早苗 (TUJIMOTO Sanae)
有明教育芸術短期大学・教授
研究者番号：20155378

宮崎 裕助 (MIYAZAKI Yusuke)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：40509444

白井 述 (SHIRAI Nobu)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：50554367